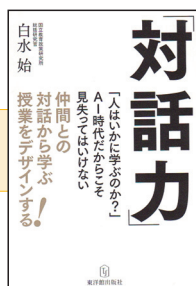


ブック

自分の考えを「壊して、つくって」深める学びは、小学校1年生から可能だが、その力を引き出す対話の場と、それを繰り返し経験していることが必要だと本書は述べて、授業手法として「知識構成型ジグソー法」を提唱する。

「対話から創造へ」については、次のように述べる。一人ひとりが自分の考えを少しずつつくり直していく。それがある程度共感を得る答えになった場合は、それを足場にまた次の疑問が見えてくるし、共感できない場合は、各自の考えをよりしっかりさせようとする動機づけが働く。こんなふうに疑問を解いては次の疑問が生まれる過程に繰り返し従事することで、子どもたちは気づけば自分で答えを創り出していく。

また、授業研究会については、



白水 始 著
2200円 東洋館出版社
☎03-3823-9206

対話力
仲間との対話から学ぶ授業をデザインする

「資料が読めない」「人間関係ができていない」といった一般的な結論は検証につながらず、常に同じ批判が使えてしまうと指摘する。そして、どこが具体的に読めないのか、どこでインタラクションが失敗したのか、それらをつぶさに見ると授業研究ができるようになってはじめて、子どもの学びにつながる」と主張する。

対話は、ソクラテス以来、教育の原点である。ただし、そのゴールは、問題解決による完結型ではなく、著者が言うような新たな疑問が生まれるという発展型であるところに本質があると言えよう。さらに、対話による「建設的相互作用」によって、新たな価値が創造されるということに、第2の本質があると考えられる。アクティブラーニングのおおもとには、「同質同士の競争」を超えたこのような自己内と対他者の対話による「異質同士の共生」と価値創造があるのだと考えたい。(前聖徳大学教授・西村美東士)